

やけどの知識とその予防

やけどは医学用語で「熱傷」といいます。熱によって皮膚や粘膜に障害が生じる外傷の1つです。薬品（酸やアルカリ溶液など）による化学熱傷や電流（落雷、高圧線）による電撃傷も含まれます。

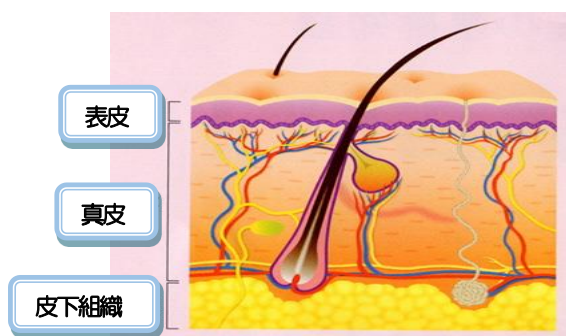
ごく軽ければ家庭での応急手当で済んでしまうこともありますが、熱傷の範囲が広く深さが深い場合は医療機関を受診し治療が必要です。

やけどの深さは大きく分けるとⅠ度、Ⅱ度、Ⅲ度の3段階に分類されます。

熱傷深度	皮膚の外見	症状
Ⅰ度（表皮やけど）	皮膚に赤み帯びる	ヒリヒリする痛み
Ⅱ度（真皮やけど）	水ぶくれ、感覚無くなる	強く焼けるような痛み
Ⅲ度（全層やけど）	蒼白、炭化による黒み	痛みを感じない

皮膚の構造

表皮・真皮・皮下組織の
3層からなっています。



やけどの原因と予防

やけどの原因になるものは身のまわりに多くあります。特に乳幼児や高齢者のいるご家庭では十分注意しましょう。

こんな事故が発生！

- ガスコンロの火が洋服に燃え移った。
- 調理中の高温油が体に飛んでくる。
- 電気ポットを倒して熱湯を浴びた。



予防のポイント！

- 火を扱うときはガスコンロに近づき過ぎないようにしましょう。
- 炊飯器や電気ポットなどの高温の蒸気や転倒して熱湯に触れる恐れのある製品は乳幼児の行動範囲で使用しないようにしましょう。

低温やけどに注意！

低温やけどは、体温よりやや高いがそれほど熱いと感じない物に皮膚の同じ部位が長時間触れてやけどになってしまうものです。

低温やけどになるまでの時間は次のとおりです。

44℃では6時間から7時間

46℃では30分から1時間

50℃では2分から3分



予防のポイント！（湯たんぽ）

- 長時間身体の同じ部位に接触させないようにしましょう。
- 布団を暖めた後は、就寝前に布団から出しましょう。
- 電気毛布も長時間使用せず、就寝前に電源を切る。

やけどの応急手当のポイント

- できるだけ早くきれいな流水で10分以上痛みがなくなるまで冷やしましょう。
手足先の熱傷では、水道水を流したままの洗面器やバケツに熱傷部位を浸す。
※蛇口の水を創部に直接当てると表皮が剥がれてしまうため注意。
- 靴下など衣類を着ている場合は、水ぶくれが破れるのを防ぐため、衣類ごと冷やしましょう。
- やけどの範囲が広い場合は、冷却し続けると低体温に陥ることがあるため、過度の冷却は避けましょう。

やけどの深さごとの対応

熱傷深度	応急手当
I度 (表皮やけど)	日焼けと同じで皮膚が赤くヒリヒリと痛みます。よく冷やしておくだけでほとんどの場合は病院に行かなくても自然に治ります。
II度 (真皮やけど)	水ぶくれは、やけどの傷口を保護する役割があるので破いてはいけません。すぐに水で冷やした後に清潔なガーゼやタオルで覆ってできるだけ早く病院を受診するようにします。ガーゼ等で覆いきれないような大きな水ぶくれになったときは、救急車を呼ぶことを考慮します。
III度 (全層やけど)	治りにくく手術が必要になることもあるので痛みがないからといって安心せずに必ず病院に行きましょう。やけどが大きい場合は、すぐに119番通報してから、流水で冷やしながら救急車を待ちます。

担当 鶴賀消防署 救急担当

